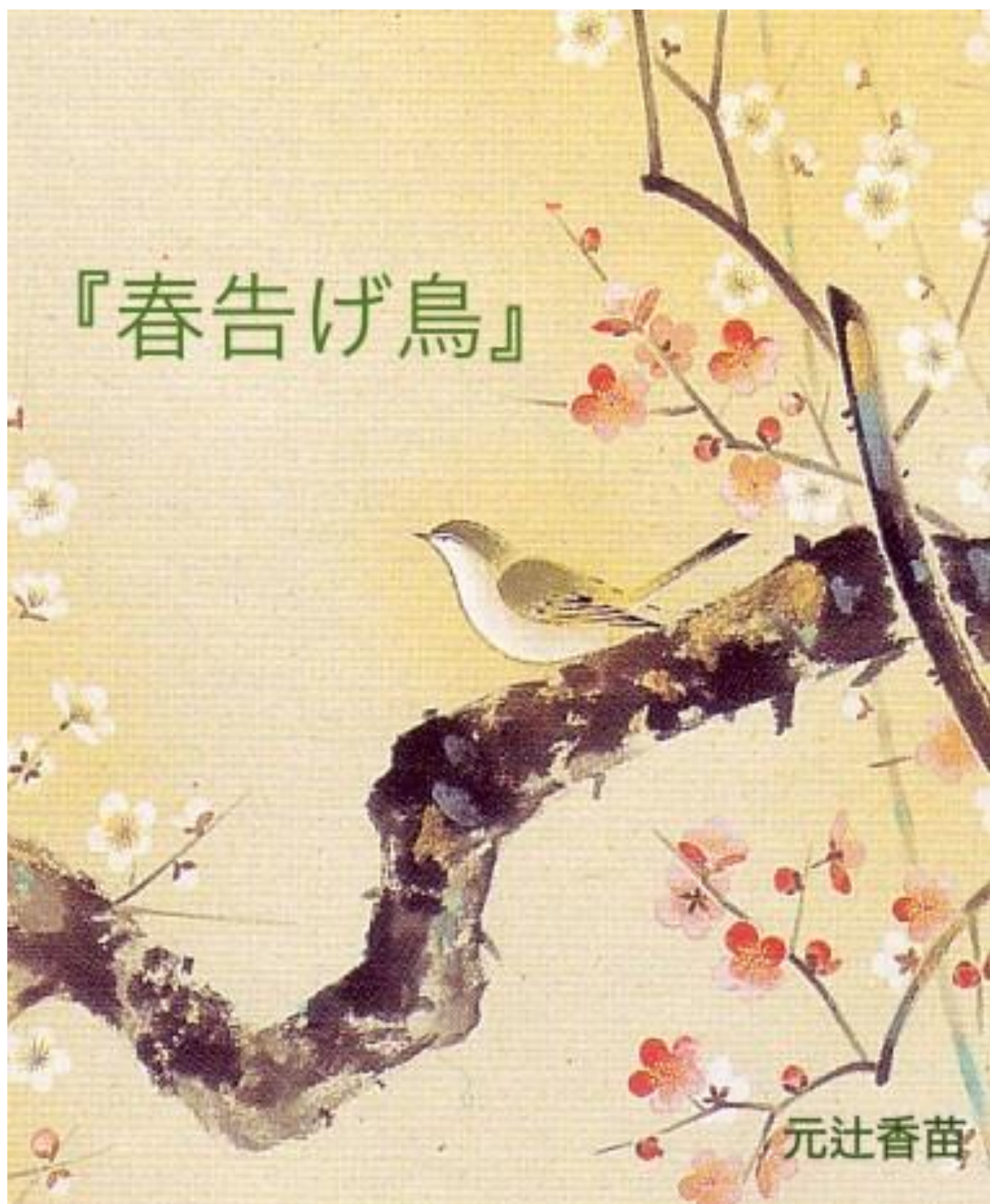


『春告げ鳥』

元辻香苗



『春告げ鳥』

サイド…♪

桜が満開の春の日のこと。みつけた。

そう囁かれたと思ったら自分の顔の横に腕が伸びて来た。

突然だったため、その人物を確認する為に後ろを振り向くことすら出来ず私の体はその人物の腕の中に収まってしまった。

私はそのことに焦りも驚きもしなかった。

心の中で、ああ、今回は見つかってしまったのかと呟いた。

しかし、今の私は彼を知らない・・・いや、知らない振りをしなくてはならない。なんて滑稽なのだろうかと思う人はいる

だろう。しかしこれは自分で決めたことであって、私はこれでいいとさえ思い始めている。

だから今更止めることなんて出来ない。

私は貴方にこの嘘をつき続けるのだ。

私たちは狂っているとそう感じながら。

一回目の人生は戦国時代と呼ばれる時代(1500年後半～1600年)だった。

豊臣が天下を治める時代。

私はそんな時代のなか小国の百姓の子として生を授かった。

ただただ普通の子だった。裕福とはさすがにいけないが生きて行くのには問題なかった。親もとても優しくたまに厳しく、私は親に恵まれたと今思う。

しかしそんな平和で平凡な時間は突然終わりを告げた。

私が齡^ハの時だった。季節は春。豊臣軍が攻めて来たのだ。お侍なんていない百姓だけの小さな村。

滅ぶのは時間の問題だった。豊臣勢もただの領土拡大としか思っていないのか軍勢の規模もかなり小さなものだった。手っ取り早く村に炎を放ったのだ。

あつけなく私たちの村は炎に包まれた。

村の百姓達は炎から逃げることにすら出来ず死んで行ったのだろう。きっと私の両親も……。

なぜ客観的なのかって？

それはもちろん私がその場に居合わせなかったからだ。

その日私は母に言われて山まで山菜を取りに行っていた。^ハの子供を一人で山に？と思うだろうが、この時代では^ハでも世継ぎに出ても不思議ではないのだ。私はいつものように山まで山菜を取り家に帰ろうと山を降りている最中に目にしたのは真っ赤な炎だった。自分の村の方向から上がる真っ赤な色。私はとても嫌な予感がし、取った山菜を投げだして山を駆け下りた。

山を降り村まで全力で走った。そのときにはもう炎は収まっていた。

「……………」

村に着いたとき私は言葉を失った。嫌な予感的中してしまったのだから。

私の足取りはとても重いものだった。ふらふらとする足で向かったのは自分の家だった。もしかしたら親はまだ生きているかもしれない。そう私のようにたまたま村を出ていて生きているかもしれない。そんな淡い考えを巡らせながら家へ向かっ

た。家へ向かう最中に真っ黒な何かは出来るだけ視界に入れないように、何も考えないようにした。家について母様と小さな声で呼んだが返事は勿論ない。

勇気を出して家に足を一步踏み出したが、私に足はそれ以上進むことはなかった。見てしまったのだ。見たくない黒を……。

そこからの私の記憶は曖昧で気付は山に居た。変える場所はなく行く場所もない。私のように生きている村人はいるかも知れないが探すことはしなかった。

平和を失ったあの日から一週間がたった。私はずっと山にいた。

生存意欲はあるようで山にある草やキノコなどを食べて生き延びていた。

しかしそれがいつまでもつか……。

餓死するのも時間の問題だった……それとも……。

さらに2日がたった。私はもうその場所から動くことすらしなくなった。

そろそろだなと自分でも悟っていた。後悔がないとは言えないがそれなりに幸せだった。母様と父様の元にいけるなら……私は静かに目を閉じた。

ガサツガサツ

草をかき分ける音がした。

私はその音を聞くと、閉じていた目を開け思わず笑ってしまった。

ああ、餓死で死ぬと思っていたが残党狩りのお待さんに自分は殺されてしまうのか。

私は逃げることはしなかった、否逃げる気力は既になかった。

草をかき分け顔をのぞかせたのは中年の男性だった。私は幽かな視界にその人物を入れると気を失った。もうこの目は開くことはないだろうと思いつながら。

しかしその期待は嬉しいことに裏切り、次目を覚ますと自分はふかふかの布団で寝ていたようだ。しかもこの布団は自分の家にあつたものよりもかなり上質なものだ。なぜ自分はこのような場所で寝ているのか分からなかった。あたりを見回しても大きな部屋などというぐらいいしか分からなかった。

私は今の状況が分からず布団から上半身を起こし天井を眺めていた。

すると部屋の襖が開かれた。そこから顔をのぞかせたのは最後に見た中年の男性ではなく自分よりもゐつほど年上のように見える真つ白な少年だった。

「ああ、やっと起きたのか君」

これが私と彼の初めての出会いだった。

それからと言うもの自分でも驚くほど話は進んでいった。

あの日私を拾ってここまで運んでくれた中年の男性はこの領主様だった。

なぜ領主様のような人があんな山にいたのかはあえて聞かなかったが。

ここは豊臣の配下である中国。まさか今までの自分の身分ではお目にかかることなんて考えられない身分の人に拾われたとは驚きを通り過ぎて嘘ではないのかと疑ってしまうレベルだった。

さて、本題はここからだ、なぜ領主様は私のような小汚い小娘を拾ってくださったのかを聞いた時、領主様は笑ってこうおっしゃった。

娘が欲しかったと

領主様は私のことについては何も聞いてもなかった。

しかし領主様はきっと私が滅ぼされた村の生き残りであることを知っていたことだろう。だから私もそのことについては言及しなかった。

私は良き人に拾われたのだなと、今にも死にかけていたこんな私を・・・。

そう思うと目から涙がこぼれた。

今思うと村がなくなったときは涙を流さなかったなと思う。

今までの分全ての感情が目からは涙が止まらなくなった。

「泣くな、君」

そんな私に声をかけてくれたのは貴方だったね。

貴方は泣いている私の涙を脱ぐってくれた。これは多分子供相手に慰めている行為だったのだろうが私は嬉しかった。彼はここの領主様の息子だそうだ。将来を約束された私とは違う世界の人。

あれから3年がたった、私は12歳になった。ずいぶん成長したものだとも自分でも思う。

あれからここに身を寄せるにあたって、沢山のことを習った。百姓の子であった私では考えられないことばかりだった。まずは作法から身だしなみ、茶道、華道、琴までも。恥ずかしくないように私は必死で事に及んだ。忙しく大変であったけど、辛くはなかった。逆に楽しいとまで感じた。何から何までが新しいことでキラキラしていたのだ。そして貴方の存在もとても大きいものだった。

「今日の習い事はもういいのか？」

夕方、縁側に座っている私に話かけてくれる貴方。

3年とは恐ろしいものだ実感する。まだ少し残っていたあどけなさが抜け、立派な男性になった貴方。この城で私に話しかけてくれる人はそんなに多くない。何たって私はただの身分の低い居候なのだから。だから私に話しか

けてくれる貴方に私はどんどん引かれていくのも時間の問題だったことだろう。

「〇〇様、ええ、今日の習い事は全て終わりました」

そうかと言うと貴方は私の横に腰を下ろした。

お茶をご用意しますと立ち上がろうとするといいと貴方はいった。

「君は何時までたつても俺に他人行儀だな。父も言っていたが君は家族だ。そんなに改まらなくていいだ」

私はもう一度縁側に腰をおろし貴方の横に並んだ。

家族・その響きはとても素晴らしいものだ。しかしその言葉に溺れてしまうのがとても恐ろしいのだ。

私はただの居候。あなたはこの城の次期領主様になるお人。

世界が違う。そう自分に言い聞かせる。

恋心なんてもつてのほかだ。自分の感情を押し殺し貴方と接する。

「いえ、そのような訳にはいきません。〇〇様は次期領主様になるお人。私のような者に話しかけて下さるだけでとてもありがたいのです。」

そう言うとき貴方は少し悲しそうにする。それもまた私の心を揺さぶるのだ。

しかし感情は出さない。これが私の決めたルール。

感情に出せばそのまま流されてしまいそうだから・・・。

さらに2年たった。私は19歳になった。

その日城の中はとても騒がしかった。

いや、ここ最近城の中はとても慌ただしかったのだ。

何があつたのかは誰かに聞いた訳でも、誰かから教えてもらった訳でもないがその話は嫌でも耳に入ってきた。

豊臣秀吉が床に伏せたらしい。

私の村を攻めて来たのは豊臣であつたし、豊臣のことなんて私にとってどうでもよかった。

しかし忘れてはいけないのは、ここが豊臣の配下であると言うことだ。

私は何とも言えない複雑な気持ちになった。

ここ最近の貴方様はとても忙しくしていらつしやるのを目にする。

縁側を歩いていると、貴方の怒鳴り声が聞こえた。離れているのはきつと領主様だろう。

怒鳴り声に驚いて一度足を止めてしまったが、このまま部屋の前で盗み聞きなんて無粋な事は出来るはずがない。私は足をすすめ自分の部屋へと戻っていった。

次の日、私は領主様に呼ばれた。

それはいつものような領主様の気まぐれや灼とかではなく緊迫した雰囲気なのはすぐに分かった。

部屋の襖を開けると上座に領主様、その横に彼がいた。

私はただいま参りましたと頭を深く下げた。

領主様の一言で私は表を上げたが、領主様と貴方様の顔はとても苦しそうで申し訳なさそうなお顔だったのも今になっても繊細に覚えている。

領主様が思い口を開き私に告げたことはあまりにも衝撃的だった。

私の人生が狂い始めたのはここからだろう……。

今この国は危機的状況にあるらしい、豊臣が床に伏せたことをいいことに徳川家康が豊臣を裏切り謀反を企てた。

豊臣の時代はこのまま終わるだろう。豊臣は徳川にうたれる。

では、ここはどうなるのだろうか？ 何度も言うがこの国は豊臣領だ。

この国を滅ばす訳にはいかない、沢山の民を守らなければならないと考えるのが当たり前だ。

では、どのようにこの国を守ればいいのか……。

答えは案外簡単なものだ。この国も徳川に下ればいいのだ。

しかし、そう簡単に下り、信用されることなんてあり得ない。

そして、領主様が出された答えは、徳川からの信用を得る為に娘を嫁ぎに出すということだった。

嫁ぎと聞けば、そんな苦行なことに感じないかもしれないが、この時代、嫁ぎに出すということは人質に出すと同義語だ。

領主様には息子はいても娘はいなかった。

しかし、養子の私がいた。

「本当に君には申し訳なく思っている……。こんな……こんなことをさせたくなんてないのだ……。しかし……。」

領主様は私を徳川に嫁ぎにとおっしゃった。

一国の領主様が私なんか頭に下げて、泣いているのを他の人が見たら、驚くだろう。

領主様はとてもお優しい方なのは出会ったときから知っている。

領主様は私のことを本当の娘のように接してくださった。

こうして私の為に涙まで流されている。

そんな領主様の頼み事を断るなんて出来ようか・・・いや出来ない。

この国は危機的状況。この国の為になるのなら私は・・・。

私は領主様の言葉に分かりましたと一言返事を返した。

私の戸惑いのない言葉を聞いて領主様は驚きお顔を上げて、何かを言おうとしたがその言葉を遮って叫んだのは貴方だった。

「君！！この話がどういうことを意味するのか分かっているのか？！」

私はいと頷いた。貴方は立ち上がり私の方によってくると両手を私の両肩においた。

自然と見上げる形になり顔も近くなる。そんな貴方の顔はとても苦しそうで悲しそうで申し訳なさそうで・・・。そんな顔、貴方には似合わない。

「死ぬかもしれないんだぞ？！それも分かっているのか？！な、なんでそんな平気そうな顔をするんだ・・・なんで・・・」

貴方は私の顔を見るとどんどん力をなくし、私の肩に手をのせたまま私も前で座り込んで俯いてしまった。その時貴方がどんな表情をしていたのか私は知らない。

「5年前のあの日・・・死にかけの私を助けて下さったのは領主様でした。私は何か恩返しがしたいと常々考えていました。重く考えることはないのです。」

領主様と目が合いニコッと笑ってみせた。

「君が・・・君が逃げたいと・・・死にたくないと・・・そう一言でも言ってくれば俺は・・・君を・・・君と一緒にどこだって・・・国なんて関係ない。君が側にさえ・・・」

頭を垂れたまま私の肩を掴む力が強くなる。

また貴方は私の心を揺さぶる事を平然というのだから困ったものだ。

私は貴方の口抑えた。これ以上聞いてはいけない。揺らいでしまうから・・・。

貴方は突然の私の行動に驚いたようにで顔を上げた。

私は貴方にだけ聞こえるようにありがとうございますと笑ってみせた。

そしてこれ以上ここには入れないと感じ、領主様に向かって頭を下げ、失礼しますと部屋を後にした。

貴方は追っ手は来なかった。

その日から貴方に合わなかった。私が故意で避けている訳ではないので（無意識に避けていたら別だが）貴方が私を避けているのではないかと思った。少し悲しく感じたが、この気持ちはいまっておこう。

そして、私がこの国から去る日も貴方と顔を合わすことはなかった。

しかしこれでよかったのだ。そう思うようにしよう。

さようなら

そう一言つぶやき私は去った。

嫁いだ先は地獄だった。

嫁いだ先は、徳川勢の国だったが徳川からはあまり干渉されないような田舎にその国は存在し、その国の領主はそのことをいいことに好きなようにやっていた。

他の国に嫁いでいればこれほど酷くはなかったのだろうが・・・外れくじを引いたと苦笑が漏れてしまう程だ。

人質と言うよりも奴隷の用な扱いだった。いや奴隷そのものだった。

与えられた居場所は地下牢だった。

暴力・性欲処理は当たり前のように行われた。死んだ方がましだと思った。いや死んだ方がましだった。

しかし勝手に死ぬことも許されない。私の心が何も感じなくなっていくのも時間の問題だった。先に死んだのは心の方だったなんて、どこかの小説のようだと思うと笑えて来るが、そのときの私はもう表情も何もなかった。

助けなんて求めるのはかなり前に捨てた。

そんな毎日だった。私はこの国にきてから10年・・・

とうとう私が死ぬことが許された。

死因は餓死だった。ここまで使っというて簡単にぽいだ。

死ぬ間際に頭に浮かんだのは、貴方だった・・・。

二回目の人生は江戸時代と呼ばれる時代(1700年代)だった。

まず前提に知っていてほしいことは、私には前世の記憶が残っていたということだ。そんな夢小説や二次元みたいなと思うだろうがそう割り切って欲しい。

前世の記憶をもったまま生まれた私だが、特に何かしたいとかはなかった。確かに彼には会いたいとは思ったが、私は一度死に再び生まれたのだ。前世の記憶の中の彼になんて会える訳がないと割り切った。

前世の記憶は生まれたばかりの私を苦しめた。あの忌々しい奴隷生活・・・思い出さないことなんて不可能だった。私は感情も表情もない赤子だっただろう。

だが、だからこそ今回は前世のように・・・と

もう一度空っぽの私の心を満たしてくれる幸せを願ってしまったのだ。

もう一度親の暖かさを感じたい。もう一度愛おしい人に出会いたい。もう一度笑えるようになりたい。もう一度・・・もう一度・・・。ただ平凡の幸せが欲しかったのだ。

しかし、その願いは生まれて10年で終わってしまった。

私の親は母親のみだった。私が生まれたときは普通の母親だと感じた。喋れるようになってからも何故自分には父親がいなかったのか聞かなかったが、私を大切に育ててくれた。

逆に、私の表情も感情も乏しく子供らしきものない私に申し訳なさを感じた。

そんな私を心配してくれる。何度も言うが本当にいい人だったのだ。私は少しずつ笑えるようになってきた。この幸せが続けばどれだけよかったか・・・。

私が10の時、私は信じられないものを目にした。

その日はただ普通の日だった。いつもと同じ日だった。扉が開かれるまでは。

突然扉が開かれて入って来たのは複数の男性だった。

家に侵入にできた男性は母を目にすると母を乱暴に捕らえるではないか。私はその光景に唾然とし動くことが出来なかった。

捕らえられながら母は、娘だけとは叫んでいるのが聞こえたが私は突如上から来た衝撃で気を失った。その日以来母に会うことはなかった。

あとから知ったことだが、どうやら母は遊女だったらしい。どういう経緯で遊女になったかは結局分からないままだが、母が自分から遊女になる訳がないのを私は知っている。

そんな遊女だった母だが、私を身ごもったことをきっかけにこの牢獄のような遊郭から逃げ出したらしい。

そして私を生み、追っ手から見つかることなく10年。

しかし追っ手に見つかってしまい、母親は捕まり、ついでに私も捕まったという訳だ。

捕まった後、私と母は離ればなれになった。私は牢に入れられた。母がどこに連れて行かれたかは分からない。

牢での生活は前世でなれている。大丈夫・・・大丈夫・・・母が迎えに来てくれる・・・。大丈夫・・・。自分を言い聞かせながら1ヶ月牢での生活を耐えた。そして1ヶ月たったある日私に知らせが届いた。

母が自殺したと。

そしてその知らせと共にいつてきたのは莫大な借金だった。これは母が遊郭から逃げ出した事によって元の借金が10年で溜まりにたまった結果だった。

一生を費やしても祓えるような金額じゃなかった。

私は母の死を悲しむ余裕も与えられず、牢から出され、母の代わりに借金を返すため10という年齢で遊女になった。再び逃げられない牢獄に閉じ込められてしまったのだ。

10で客がとれるのかと思うが、この時代そんなことは関係なかった。

私には拒否権なんてなかった。

前世と同様、私はただの奴隷だった。

一度なくした感情だったが、母のおかげで少し取り戻しつつあった感情に再び蓋をした。

前回よりもより深く蓋をした。

上げて落とされるのは、普通に落とされるよりもより早くより深く落下するものだ。

願ってしまったからいけなかったのだ。幸せなんて願わなければこれほど心に傷を負うことはなかったのだ。

そう考えれば考える程より思考のぬかるみにはまって行った。

再び感情をなくした私であった、客はそんなことお構いなしだ。

私はもう何も望まないそう決めた。

私が遊女になって15年たった。私は25歳だ。後2年で前世の自分の年齢を抜くそんな春のある日。

私はある客をとった。貴方にそっくりな人だった。いやそっくりには語弊がある。私が前世で最後にあった貴方は20歳だった、この客は28〜30程の男性だった。しかし貴方が成長したような、いや成長した貴方を見ているような人だった。

私の脳裏には私も生まれ変わっているのだから貴方も生まれ変わっているのも不思議ではないと思ったが、そんな考えはすぐに捨てた。

たとえその人が貴方の生まれ変わりであったとしても、記憶をもっているなんて万の確率もないのだ。そうそうあるものじゃない。

期待なんてするな。期待するだけ無駄だ。結局その期待は裏切られる。

これが私の脳裏を支配する。私は何も望まない・・・。

私はその客も他の客と変わらない接客をした。

お客の彼は遊郭にはなれていないのか少しそわそわしていたが、事を終えると彼は少し寂しそうにして帰って行った。また別の日は彼は遊郭に訪れて私を買った。

そしてまたある日も、ある日も……。

あれはこの遊郭の常連になった。他に綺麗なお姉さんがいるというのに彼は私ばかりを買った。そんなある日彼は私に訪ねた。

「君は前世を信じるか」と「君には前世の記憶があるか」と

突然の彼の質問に私は焦ることも慌てることもしなかった。私は冷静に彼の質問に答えた。

前世なんて信じないと……。前世の記憶なんてないと……。

これが、私が貴方についた初めての嘘だった。

今後私は、貴方にこの嘘を尽き続けることになるとはまだ思ってもなかったが。

このとき私は彼が貴方であるとしかも前世の記憶を持っていると確信があつたが、あえて私はそのことを触れなかった。貴方も前世に縛られているのか。そう思った。きっと貴方は優しい人だから、前世で私を嫁に出したことに罪を感じているのだろう。

しかし前世で私が好いていた人だからこそ、遊女である私なんかにかまっていないで貴方自身の幸せを探して欲しかった。

さようなら、私の初恋

二回目の私の生は案外ちっぽけに終わってしまった。

彼以外にも私なんか（私の容姿は平凡だ）に執着する客が何人かいた。その客の1人がどうやら現在で言うヤンデレという部類で、私はその客との事の最中に首を閉められ殺された。抵抗はしなかった。なんとまああつけない人生だったなと思った。

しかし私が居なくなることで彼は私という罪の呪縛から解放されるのではないかと思うと、私の死にも何かしら誰かの役にたつのだと嬉しくかんじた。

三度目の人生は二回目と同等に江戸時代と明治時代にかけて（1800年代後半）で幕末と呼ばれる時代だった。

今回私には父親はいたが母親がいなかった。母は私を生んで暫くして亡くなったのだ。やはり前世の記憶を持って生まれた私は、赤子でも意識ははっきりしていた。私を生んでしまったせいで亡くなってしまった母親に対して罪悪感で押しつぶされそうだった。

私の父は家にいることはほとんどなかった。私は家で常に一人だった。幼子らしからぬ私だったが、父は私にかまっている余裕なんてなかった。せいぜい迷惑のかからない子供でよかったと思っていたかもしれない。しかしちゃんと養ってくれてはいたので、そこには感謝している。どこで何をしているのか幼子の私は知らないと父は思っていただろう。

実際私は、父がどのようなことをしているのか知っていた。父は侍だった。そしてある藩に所属していた。

1868年王政復古の大号令が発令された。

事はいっぺんした。

新政府が誕生したのだ。

そして同年薩長と旧幕府との対立が激化し鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争）が勃発した。結果がどのようになったかは歴史に詳しい人は知っているだろう。

会津藩は敗北。朝廷は会津藩を朝敵とした。

父が所属している藩がまた別だったら、この結果を笑って聞けていたことだろう。しかし私は知っていた。父が会津藩であることを。

その後会津は抵抗したが新政府軍にかなうことはなかった。

父は幾度の戦争中に戦死したと聞いた。死体は見た訳ではないのが、まあきつとそうなのだろう。

しかし、そのことを耳にして涙は流さなかった。

もともと私には感情という感情は持ち合わせていなかったし、それほど父に対して思い入れもなかった。

薄情なやつだと思う人は居るかもしれないが、きつとそれが正解なのだと思う。私は薄情なやつだ。養ってもらった父が親でも何も感じず、何も思わないそんなやつになってしまったのだ。

それから私はどうしたかというとか処刑されて死んだ。

この時私は齢18だった。

会津藩は朝敵となったのだ。新政府に負けた会津藩は会津に所属する者を処刑していった。勿論身内も含まれる。

抵抗するものも勿論居た。国から逃げ出す者もいた。しかし私は抵抗も逃げ出すこともしなかった。何故？と聞ければ明

確に答える事は出来ないが、流れるがままにだ。

そして処刑が近づいてきたある日、私は今回の人生で初めて感情を出したかもしれない。

ほんと神様は意地悪なことをすると思った。

新政府側に貴方を見たのだ。それが貴方であるかただの空似なのかは私に確認すべはなかったが、きっと貴方なのだろうと私の中で感じた。

そのころの季節も春で桜が満開の時期だった。

今思うと貴方に出会うのはいつも春野費だったなと思う。

神様は本当に意地悪だ。また私を貴方に会わすなんて……。

処刑当日、その場に貴方もいた。処刑される人数は少なくはないので貴方はきっと私に気づかないだろう。死ぬ間際、貴方を最後にちらっと見た。目があったような気がしたが私から貴方までかなり距離があるので、気のせいかもしれないが……。このような状況で私が思ったことは「（あなたがこちら側ではなくてよかった）」だった。

結局私の中の貴方という存在は消したくて消せないものになっていくのだ。

本当に神様は意地悪だ。

きっと来世でもまた貴方に会うような気がした。

期待はしないがただそう思ったのだ。

そして桜が散る下で私の命が散った

さようなら、三度目の私……。

4度目の人生は大正時代から昭和時代にかけて（1900年前半）時代だった。今回の生では特に語ることはなんだが・・・。

本当に簡潔な人生だったのだ。

生まれた私には前世とは違い両親がちゃんと2人いた。

しかし、お金がなかったのだ。

とても貧乏だったのだ。借家すらなく野宿だったほどお金がなかったのだ。

戦後恐慌だったこの時代だったがこれ程まで酷いのは稀だっただろう。

そんなお金がない状況で生まれた私は望まない子であったことだろう。

しかし両親はそんな私であったが、生んだ責はあるのだろう。育ててくれようとはしたようだ。

しかしやはりお金がなかった。お金がなければ食べるものも手に入らない。

両親は私が1歳の時、私を置いてどこかに言ってしまった。

まあ言ってしまうと捨てられたのだ。

両親は笑いもしない、表情も動かさない私に恐怖していた節があったし、この状況にも私は何も感じなかった。ああ、とうとうか・・・と思ってしまうぐらい当たり前のように感じた。

その後1歳であった私に何か出来るはずがなく、其処らへん道端で餓死して死んでしまった。

本当に短い短すぎる人生だった。

貴方に会うことがなく、ほっとした自分が居た。

㊦回目的人生は昭和時代だった（1900年中旬）。

そろそろこの時代からは現代に近づいてきただろう。

今回の私の人生はごくごく普通で両親も両方存命しとてもそれなりに幸せと言えるものだっただろう。私もこの両親に迷惑はかけまいとおとなしい子を演じてみせた。

小学校、中学校、高校とごく普通に私は育った。

しかし、ある春の日私が高校から家へと帰宅する途中のことだった。

それはほんとに一瞬で私の背後でゴツと何か重い音がしたと思ったら、私はそのまま意識を失った。

次、私が目を覚ましたらそこは冷たい部屋だった。そして後部がズキズキと痛んだ。このときやったあの重い音は鈍器で自分が殴られた音なのだと理解した。そして気を失った私を殴った誰かがここまで運んだのだろう。

頭部には包帯が巻かれていた。

こんな状況は初めてだが、このような状況には慣れている私は特に焦る様子もなく私は部屋を見回した。

この部屋は地下室のような場所で、その部屋に置かれた鉄パイプ式のベッドに私は寝かされていたようで、さらには自分の両足には足枷がベッドの鉄パイプに繋がれていて13程しかない鎖で私はこのベッドから離れることが出来ない。そして、

この部屋には扉が1つで窓もない。これは所謂誘拐というやつなのだろう。

私はこの状況に特に何かをする訳でもなく、いや何もすることが出来なかったが正しいのかもしれない。私はただその場でぼおっとしているだけだった。

私を攫った人は私なんて攫って何をしたいのだろうか。身代金目当てなら両親に迷惑がかかってしまうのでそれだけはどうしても避けたい。でも身代金目当て以外で私を誘拐なんてあるのだろうか。いつそ死んでしまった方が両親に迷惑をかけずにすむのだろうかなど何もすることがないので思考を巡らせていた。まあ例え身代金目当てであって迷惑をかけないように私がしんだところでそれを両親に伝える術がないのだけれど・・・と自分の思回路の残念さに苦笑した。

そして私が目を覚まして1時間程たったのだろうか。部屋に唯一の扉が開いた。

さて、私を攫った人はどのような人なのかと私は扉に視線をむけた。そしてその扉から入って来た人に私は驚愕した。

「ああ、やっと目を覚ましたんだな。すまない、手荒なまねをしてしまつて頭は大丈夫かい？」

入って来た人物は私が起きていることを確認した後、自分が殴った私の頭部の心配をした。

私は自分で殴つたというさらに誘拐した人物が心配していることに驚いたのではなく、その人物はまたしても『貴方』にそっくりだった。いやもう目を背けることはやめよう。その人は貴方だった。

貴方はベッドに座る私に近づいて来てベッドの端に腰を落とした。

「君があまりにも手に入らないから、このようなまねをしてしまつたが、これでやっと君は俺のものだ」

貴方は私の頬に手を添えてそのまま私を抱きしめた。

私はそれを抵抗もなくうけいれてしまった。

逆に私を求めてくれる貴方をさらに愛おしく思ってしまった。

「やっと手に入れた。もう離したりなんてしない。」

先に狂ったのは私か・・・貴方か・・・。

そして私の軟禁生活が始まった。

私の世界は貴方一色になった。貴方は私をここから出してくれることは一度たりともなかった。

軟禁生活といっても貴方は私を大切にしてくれた。いっぞやの奴隷生活とは比べられないほどだ。

貴方は私に2回目の人生の時と同様の質問を投げかけて来たが、私はあのと時と同じ返事をした。

私は何度だってこの嘘をつき続けるのだ。

なぜそのような嘘をつくのか・・・。理由は2回目のときとは大きく異なる。

二回目のときは貴方が前世に縛られないようにと、そう思ってた嘘であった。

しかし、今回は貴方が私をもっと求めてほしくて・・・嘘をつくことで貴方は私を求め続けるのではないかと思ってしまったのだ。

期待はするべきではないとあれほど自分に言い聞かせたというのに、やはり人間は欲求に忠実な生き物だなとしみじみと感じた。

そして5回目の人生の私は老死だった。

私の人生の中で一番幸せな死に方たつただろう。
貴方が側にいてくれる中で私は死ねたのだから。

の回目の人生はあまりいいものとは言いがたかった。勿論前世の奴隷時代や花街で生きていた時とは比べ物にならないかもしれないが。

当時5歳だった私の両親は交通事故にあつてなくなった。即死だったらしい。

そして祖父祖母もなく身寄りのない私は親戚をたらい回しにされた。

私の両親には財産という財産もなく、こんな私を受け入れたところで一文の特にもならない。
なので、親戚も親戚で受け入れることを押し付け合っている状況だった。

始めの親戚の家では居ないようにあつかわれ、ご飯も何も用意されない。

2つ目の親戚の家ではある程度、年齢を重ねたことによって、全ての家事を押し付けられ召使いのように働いた。

3つ目の親戚の家ではさらに年齢を重ねたことによって、その親戚の息子にいいように扱われた。

4つ目の親戚の家でも以下同文だ。

世間一般から見たら私はだいぶかわいそうな子になるのだろうが、私はこのことに対して特に何も感じなかったしあの頃と比べればだいぶ生きやすい環境であると感じた。

そしてやっと高校を卒業し自立出来る年齢になった私は親戚の家から出た。

出て行く際に恩を仇で返すつもりかと暴行されたがあまり気にしない。

親戚はなんだかんだで、使い勝手のいい私を召使いとして家に置いときたかったのだろう。

しかし私はそんなことを気にもせず家からでた。

そして家を出たはいいものの特に行く場所もないし高校を卒業したばかりの子供を雇ってくれることも勿論ない。出来てアルバイトぐらいだ。

そこで私が向かったのは子供でも雇ってくれて手取り早くお金も稼げるところだった。そんな条件のいいところなんてあるのかと思うかも知れないが勿論ホワイトではない。所謂キャバクラいうところだ。しかも裏ではお金で体すら差し出しているブラック違法店だった。

なぜ自分の体を簡単に差し出せるのか・・・私は貞操観念が他の人と比べて低いのだと思う。いや低いのだろう。この体も初めてではないし、過去にもっと酷い目にあつた。これくらいどうってことないとすら感じてしまう。

その店で働き始めお金もそこそこ集まって、養ってもらった親戚にも今までの私の生活費を送り、これからの生活にも自由しないなと思ひ始めたころ貴方が店に現れた。

ああ、やはりこの時期も春だったな・・・私はいつも春の日に貴方にある。

多分貴方は会社の付き合いでこのような店に訪れたのだろう。嫌そうな顔をしていて面白かった記憶がある。

そして、貴方と目があつたときの貴方の顔は嫌そうな顔から一変して目を見開いて驚いていたね。

しかし私は貴方を知らない振りをしなくてはならない。私は他の客にむけるようニコツとわらってみせた。

この店で腹吹き始め私はいままで以上に表情を動かしていると思う。心はこもっていないが。いままで使っていなかった表情筋を使うのはなかなか疲れる。

貴方は上司がいるにも関わらずすぐに私を指名した。貴方の行動に上司も驚いているようすだった。その日は何事もなく終わり、貴方は帰っていった。

そして貴方はその日を境にこの店に通うようになった。

いままで固定の客なんて居なかった私に初めて固定のお客が出来た。

他に働いている人はなぜ貴方が私を指名するのか理解出来なかったと思う。

何度も言うが私の容姿は平凡でいいとは言えない。しかし貴方の容姿はとても美しくて白くてモデルのようで私とはとても不釣り合いだ。

貴方はこの店の裏で行っている体の売買のことを知ってしまったとき貴方は怒った様子で私に言った。

「なぜこのような店で働いているのか」と

私は簡潔にお金欲しく変える場所がないからと答えた。

その日貴方はお金を払って私を抱いていった。

そしてしばらく貴方は店に訪れなくなっただと思ったら、ある日店長にクビを言い渡された。

私はあまりにも突然のことに驚いた。店長に理由を聞くと店の奥の部屋に連れて行かれ、その部屋には貴方がいた。

どうやら貴方がお金を出して私を買ったらしい。

いや少し語弊がある。お金を払って私をこの店をやめさせるようにしたらしい。

「君がこんな店で働くことはない。俺が君を養ってあげるから。帰る家がないのだろうか？俺の家において一生大事にするさ。ああ、あのとき叶わなかった事がやっと叶った・・・。」

そう言って貴方は私に手を差し伸べた。

私が手を取らないことは考えなかったのだろうか、貴方はとても嬉しそうだった。

しかし私はやはり貴方の手を取ってしまった。馬鹿なのは私の方かもしれない。

そして私は貴方と一緒に暮らし始めた。前世のように地下牢に閉じ込められることはなかったが家からでることは極力なかった。

貴方は常に幸せそうだった。私もそんな貴方を見ていることが幸せだった。

私たちは狂っている・・・そう感じた。

「回目の人生はごくごく普通で、両親も存命で貴方に出会うこともなく私は大学で出会った人と恋をして結婚した。

旦那はこんな私であったが愛してくれた。

まだ子供は居なかったが暖かい家庭だったと思う。

しかしそんな家庭もすぐに潰れてしまったのだが・・・。

結婚から1年ほどたった。旦那の会社も落ち着いてきてそろそろ子供も欲しいなと思っていた時期だった。

ある春の日の休日、旦那は家に居て、私は買い物に出かけていた。

両手に食材を持ち割らしは家に帰宅した。恐の夕飯は暖かい鍋にしよう、そんな呑気なことを考えながら玄関を開けたがいつもならおかえりという貴方の声が聞こえなかった。どこかに出かけてでもいるのかもしれないとあまり気にも止めずに荷物をもったままリビングの扉を開けると私は扉の向こうの惨状に荷物を床に落としてしまった。

「えっ・・・な、何これ」

思わずそんな台詞がこぼれてしまった。

リビングは真っ赤だった。床にも壁にもその朱は着いていた。テレビついたままで、テレビの前のソファで真っ赤な旦那が倒れていた。

このときやっとこの朱は血であることが理解出来た。しかもこの血は旦那の血だ。

旦那に近づく為私は思い足をあげてリビングに入ろうとした。

しかし突然誰かに布を口と鼻に押さえつけられ、布に薬でも塗っていたのか私はそのまま気を失った。デジャヴだ。

次、私が目を覚ましたとき私は体を縄でぐるぐるに縛られていた。そして動く首だけ動かしてみるのが外という事ぐらいしか分からなかった。ザリツと砂を踏む音がした。私は首だけうごかしてその方向を向くとそこに立っていたのは貴方だった。今世でもう貴方には会わないと思っていたがそんなことはなかったみたいだ。

「君が俺以外の誰かのものになるのがいけないんだ。俺のじゃない君はいらない。」

貴方の目はとても冷たかった。旦那を殺したのは貴方だったのだろう。

貴方は私に近づいて私の手を掴んだと思ったら、私を後方に投げた。

地面に叩き付けられるかと思ったが私を包んだのは浮遊感だった。どうやら私の背後は崖だったようで、投げられた私はそのまま重力に従い落下していった。

落下している私、貴方がどんどんと遠くなっていく。手をのばしたくても縄のせいで身動きが取れない。

ああ、貴方がどこまで落ちて行くのか・・・。

∞回目の人生では前回のこともあり誰とも結婚はしなかった。

死ぬまで独り身だった。

そして貴方とも出会うこともなかった。

そして9回目の人生・・・冒頭に戻る。

「みつけた。」

そう囁かれた時には私は貴方の腕の中にいる。
貴方は狂っている。そして私も狂っている。

これからも貴方は私を求めて、私も求められるがまま。
これはもう逃げられない運命なのであると感じた。

しかし私たちは不幸ではない、幸せだ。
私たちの関係はこれでいいのだ。

私は貴方に前世を明かさない。貴方は前世に縛られ続ける。

さて、今世の貴方はどうやって私を縛るのだろうか・・・。
そして来世もそのまた次も・・・。

私はそつと目を閉じた。

END

（実は男視点もあるのですが、どのように彼が狂って行ったのか考えてみて下さい。）